

論文要旨

学位論文題目：韓国語の事態把握と日本語学習に及ぼす影響 - 受動表現の産出を中心に -
氏 名：鄭在喜

「話者の言語表現は、同じ出来事を述べる場合であっても話者がその出来事をどう捉え、それをどの文法や語彙を用いて表すのかによって異なるため、意味が異なってくる。このような現象は話者の母語が異なる場合はなおさらであり、ある出来事を表す母語での表現に差があるため、適用される表現にも乖離が生じることとなる。池上（2006）は、こういった現象について話者の認知的な操作しだいで同じコトでも随分違った形で認識され、それを反映した違った意味の言語表現が産出されるとしている。即ち、話者がある事態に際して何をどう語るのかは、究極的には話者がそれらの自らにとっての関わりを評価及び判断することによって行うようになり、そういった事態把握（construal）の営みは非常に主観的（subjective）な性格のものであると述べている。なお、池上は日本語話者好みの事態把握のスタンスとして、認知言語学でいう主観的把握（subjective construal）を想定することができるとした。

本論文の目的は、受動表現に現れる韓国語の事態把握の傾向、即ち、日本語のように主観的なのか、それとも英語のように客観的なのかを明らかにし、それが日本語を学習する際にどのような影響を及ぼすのかを解明することにある。それを明らかにするために用いた理論的枠組みは、話者の事態の捉え方がそれぞれの言語にどのように組み込まれ、どのような影響を及ぼすかについて研究を行っている認知言語学である。研究対象とした言語表現は、話者の事態把握が現れやすいとされる受動表現を取り上げた。そして、認知言語学の事態把握という概念より、次の3つの研究について論じた。

研究1では、文献を用い、日本語、韓国語、英語の受動表現に現れた言語類型論的分析を行い、研究2では、実験的分析として日本語母語話者、韓国語母語話者、英語母語話者の受動表現に現れる事態把握の異同を分析及び考察し、韓国語の事態把握の主観性を明らかにするため、主観的事態把握を行うとされる日本語、客観的事態把握を行うとされる英語との比較を行った。なお、研究3では、韓国語の事態把握が、日本語を学習する際にどのような影響を及ぼすのかについて考察を行った。

調査は、11コマになる台詞を入れた自作漫画を用いて実施した。この漫画は述部部分を空欄（下線）にし、調査対象者にどのような表現が適切かを考えさせる構成になっている。この空欄に、認知の主体である話者の事態把握が読み取れる言語表現、つまり、本論文の分析対象である受動表現が入ることを意図して作成してある。調査対象者である日本語母語話者、韓国語母語話者、英語母

語話者には、ストーリー構築法を参考に漫画のストーリーを文字で記述してもらうことにし、産出した書きことばをデータとして扱った。そして、産出された述部表現に注目し、本調査ではさらに、言語化に当たり日本語母語話者、韓国語母語話者、英語母語話者の事態の捉え方の傾向を分析するため、単に下線を埋めるのではなく、調査対象者が漫画の全体のストーリーをまとめて産出する形式をとることにした。分析は、主観性というものを客観的に測定するため、寺村(1982)と牧野(1996)のウチ・ソトという概念に倣い、二分法を用いて各産出文の主観性を測った。

その結果、受動表現に現れた韓国語母語話者の事態把握は、研究1の文献を用いた分析、研究2の産出データを用いた実験的分析の両方から、日本語母語話者よりは客観的把握をする傾向があることが確認された。そして、研究3からは、上級学習者である韓国語を母語とする日本語学習者は、状況によって母語で自然である表現と、日本語で自然である表現を使い分けていることが窺えた。即ち、日本語母語話者のように主観的把握をしていると思われる傾向が観察され、上級学習者であるため文法に対する理解度が高く、母語の影響が少なくなることが確認された。しかし、フォローアップインタビューの結果、母語の韓国語に存在しない日本語の間接受動の非所有物受動表現、いわゆる自動詞の受身は、上級学習者であってもその定着や応用が容易ではないことが見受けられた。

以上、本論文は、韓国語母語話者の事態把握性に関する新たな考察、つまり、韓国語母語話者が日本語母語話者より客観的把握をする傾向が存在することをある程度論証できたと考える。そして、事態把握の主観性というものを客観的に測定することを試みた点で意義があると思われる。

最後に、本論文の結果から、上級日本語学習者がより自然な日本語を発話するためには文法的な要素だけでなく、日本語母語話者の事態把握に関する明示的な指導、かつそれに関する理解が必要であることがいえると思われる。」